優秀賞（北海道知事賞）

多様性を認め合える社会に

芽室町立芽室中学校　二年　阪本　桃香

「じゃあ、バッサリ切っちゃうね。」

美容室の先生が私の髪を切る直前、いつもかけてくれる言葉です。ヘアカットをするのは二年から三年おき。私がなぜこんなに間隔を空けて髪を切るのか、それはヘアドネーションをするためです。そもそもヘアドネーションをやってみたいと思ったきっかけは、何気なく見ていたテレビで一人の少女のために多くの人が髪を伸ばし、ウィッグをプレゼントしていた内容にとても感動したからです。これなら私にもできる、髪の毛がなくてかわいそうな子供がいたら寄付してあげたいと感じたのです。

ヘアドネーションは髪の毛を寄付するボランティア活動のひとつで、寄付された髪の毛は病院や先天性の無毛症、不慮の事故などで髪を失った子供たちが使用する医療用ウィッグとして生まれ変わります。カットする髪の長さが三十一センチ以上あれば誰でもこの活動に参加できるのです。私はさっそく髪の毛を伸ばすことに決めました。

何年も伸ばした髪を切るときには、不安と寂しい気持ちもありますが、無事にカットが終わると「やっぱりやって良かった！私も人の役に立てた気がする。」と達成感だけがありました。

しかし、転機が訪れたのは中学一年生のヘアドネーションの時でした。美容室の先生に「今までは切った髪の手続きはお店でやっていたけど、今年から本人が送るようになったんだ。それでも良い？」と言われ、一瞬戸惑いましたが、せっかくここまで伸ばしたこともあり、自分で送ることにしました。帰宅してすぐに美容室で手渡された説明書を読み込みました。そこには性別や年齢、髪の状態などをドナーシートに記入して同封することや、髪の毛を送る際の注意事項が細かく書かれていました。以前まで、髪を切ってよいことした気持ちになっていましたが、髪を送る作業を経験して、ウィッグを使う子供はどんな人なのか気になりました。インターネットで調べてみると、ある新聞記事を見つけました。「ヘアドネーションを受けた子供の気持ち、考えたことありますか？

なぜウィッグ必要？着けても着けなくてもいい社会へ」というタイトル。さらにそこには、こんな内容が書かれていました。「ウィッグを着けることで前向きになれる子どももいるが、ヘアドネーションという言葉を聞くだけで心がしんどいという子もいます。」ウィッグは全ての子供達に喜んでもらえていると思い込んでいた私はとても驚き、正直複雑な気持ちになりました。確かにウィッグを着けたとしても問題がすべて解決するわけではありません。使うことによって強風で飛ばないだろうか、激しい運動や体育の授業で外れないだろうかなどと、違う種類の心配事が出てくるでしょう。そう考えるとウィッグを使う限り、悩みは一生終わらないのかもしれません。

美容室で手渡された取り扱い説明書の最後には、この言葉が記されていました。

「必ずしもウィッグを必要としない社会へ。」ヘアドネーションを推奨する団体は最終的に髪がないことも個性として受け入れられ、多様性が認め合える社会を目指しているのです。

私はヘアドネーションを通して、人の様々な思いや事情に触れ、多様性について考えを深めることができました。多様性とは、自分との違いを理解し、尊重することだと思います。人には、年齢や性別、価値観や人種、宗教など様々な違いがあります。その一人ひとりの違いを認め合い、共に生きていく明るい社会を作っていきたいと思います。髪がなく苦しんでいる子供達がウィッグを着けなくても安心して生活できる世の中になることを望みます。

私は来年も、四回目のヘアドネーションをする予定です。しかし、前までの私みたいにかわいそうと思う理由ではありません。ヘアドネーションの先にはどんな人がいて何に苦しんでいるのか考え、多様性を認め合える社会にしたいからです。ウィッグを使っている人が居心地のよい社会であれば、私たちにとっても住みよい社会になるはずです。

どうか、誰もが日々の生活に楽しみを感じられる明るい世界を生きられますように。